

# 被災地南三陸町 志津川高校からの発信

## 志津川高等学校教諭

東京都派遣

佐々木

純

吉野作造の業績から「震災復興のヒントは何か」を考える中で、歴史を学ぶ意義も確認するために『大正時代の震災と復興—吉野作造の思想・活動を中心にして』というテーマで大川真副館長による講演会を実施した。

「手助け」として「仕事を失った人たちに對して平和村をつくり、きちんと仕事ができる環境をつくる」行動をしたと認識した。



佐々木純先生

まず、生徒からの報告書をもとに、この講演会で生徒が「わかったこと」を生徒の言葉で綴りたい。「震災復興のために吉野は何をしたか」について吉野は人間を「他者を尊敬し信頼すること、無限に発達していく」存在と見なし、この「互いを尊敬するという道徳的な考えが社会の発達・振興につながる」という思いで「被災した人が自立す

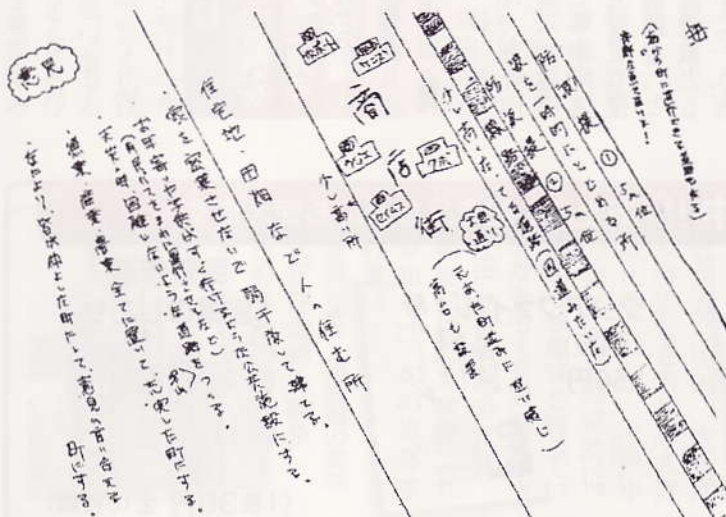
る手助け」として「仕事を失った人たちに對して平和村をつくり、きちんと仕事ができる環境をつくる」行動をしたと認識した。また、吉野の考えを「私たちに向けられた言葉である」と感じて「人間は正しくある」とすれば必ず進化するのだから「道徳の気持ちがおこれば、社会は発展する」復興につながる」と受け止めて「一人ひとりが人格を向上させて豊かな人間となって自らが主体となって社会をつくる」ことが重要」という意思表示につながった。その一方、互いを尊敬するには「コミュニケーション」が不可欠だが「他地域から来た人と話をする」と「が不得手な「東北人の弱さ」の克服の示唆も受けた。「なぜ歴史を学ぶのか」について「歴史はこれからの日本をつくっていく教材になる」との理解が得られた。換



大川真副館長

言すれば、「歴史は、昔の出来事をヒントに未来を考えるもの」「歴史は過去のことを振り返るだけでなく、過去との対話で過去のことを学び、それを現代に役立てることが大事」と認識したのである。その過去との対話で「昔の出来事だけと今と似ている」ことを学び、「昔も震災を乗り越えたと思うと今もきつとのりこえられる」と勇気をもらった」と歴史学習の効用を体感した生徒もいた。さらに「私たちはこれからの未来に必要な存在」と自己の存在意義を再発見し「自分たちはこれらの未来に歴史を残す重要な役割をはたしている」と自己の使命を再認識した生徒も出てきた。具体的には「歴史は次の世代へと伝えていくことが大切」だから「震災が起きたことは決して忘れてはいけ

ないことなので自分が体験したことも次世代へと伝えていきたい」「話を聴いて考え方が変わった。震災で悲しい思いをしたけどもこれからは私たちが前みたい南三陸町に戻していきたい」と思うに至った。次に、こうした思いを具現化するためにグループごとに「復興計画プロジェクト」を立案させる学習活動を試みた。どんな地域に復興していくかについて、被災してみても問題に思ったことを身近な地域の視点から意識化させ、その課題解決の方策を考えさせた。津波への対策を講じるだけでなく、吉野の「人は他人を信じることで成長する」考えを敷衍した「地域の絆が深い町」づくりや吉野の「仕事が出る環境をつく



る」活動から「経済活動が盛んな町」に復興する考えを導き出した。そこで、こうした考えをイラストで表現させた。

### (1) 防波堤で町を守る

海岸に二重の防波堤を作つて商店街を守ります。住民の話し合いによって、産業の復興や社会福祉を進めていきます。